

二〇二二（令和四）年度 長野大学 編入学試験  
小論文

次の文章を読み、設問一および設問二に答えなさい。

社会科学を学ぶことは、われわれにとってどういう意味をもつか。これには、さしあたってこう答えねばなりませんまい。社会科学を学ぶことは、何よりもまず、それ自体として意味をもっている、と。つまり、知るに値いすることを知らうとする、そういう知的価値の追求である限りにおいて、それ自体として意味があるわけです。言いかえれば、そこには学問のために学問をするという一面が確かにあるわけです。この点を忘れずと、大学の自治とか、研究者の自主ということを十分に基礎づけることができなくなる、と私は思います。そして、社会科学の研究が、いつでも、政治のためとか、あるいは経済のためとか、あるいはその他のなんらかの価値にただ奉仕するものになってしまう。ですから、社会科学を学ぶということは、知的文化的領域における営み、つまり学問として、他の文化諸領域における営みに対して少なくとも相対的に独自の意味をもつということ、つまり、そういう言い方をすれば、自己目的という一面ももっていることは忘れてはならないと私は思います。

（中略）

さきほど言いましたように、社会科学を学ぶということは、学問、つまり知的文化領域における営みとして、学問のための学問ともいえるような自己目的の一面を、少なくとも相対的にもっています。そしてそれを忘れると、ある種の退廃が起こりうる。たとえば、学問的認識に対して他の文化領域からの強い要求が生まのままでもつつけられるというばあい、これは正しいにちがいないとは思いますが、ちょっと具合がわるいから黙っていようとか、いや黙っているだけならまだいいのですが、まあ少し別の形にしておこうとか、極端なばあい、事実を書きかえたりなどしましたら、それこそ学問の営みは成り立たなくなるでしょう。諸君はそのように考えませんか。実は、こういうことは歴史の上ではしばしば行われてきたわけで、あるいは、今でもどこかで行われているのかもしれない。そういうふうには学問が他の文化諸領域の生まの要求の前に屈して、ことからの真実、つまり真理がかくされてしまうと、学問は成り立たないばかりか、ひいては他の文化諸領域にもよくない影響を与えることになるでしょう。学問のもつそうした一面を忘れずと、そうした退廃が起こることになるわけです。とりわけ、ある特定の具体的な政治的要求にだけべったりとくつついて、学問をすべてそれに従わせようしますと、おそらく、人々のあいだに学問をやるという意欲さえなくなってしまいうでしょう。

ところが、こんどはそれと逆に、学問の営みをひたすら自己目的と考えて、ただ学問のために学問をやる、そして、たとえば社会科学さえもが社会現象の現実の動きに対してなんら切実な関心を示さない、というようなことになりましたと、こんどはまた別の退廃が起こってくる。そして、現在学問のもつこうした一面が、いま諸君の頭のなかでとくに大寫しになって出てきているのではないのでしょうか。このことは確かにもっともな点を含んでいるように私は思います。言いかえるならば、社会科学は正しい意味での時代の要請にとって、あるいは別の表現をしますと、時代を支えている、あるいはその動きを推進している思想にてらして、どういう意味をもっているのか、この点が現在たしかに問われているといわねばなりませんまい。

（大塚久雄「社会科学を学ぶことの意義について」『生活の貧しさと心の貧しさ』所収。一部改変）



